千人針研究に向けての整理

渡邉一弘

はじめに

先の大戦中、銃後の祈りを込められたお守りとして全国に広がった「千人針」については、様々なところで様々な解説がなされ、ある程度のイメージが定着している。まず、その千人針に対する一般的なイメージをいくつかの辞事典を例にとってたどることとする。

○『大辞林』[1]「一枚の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ刺して縫い玉をつくり、武運と無事を祈って出征兵士に贈ったもの。日清・日露戦争の頃に始まったという。千人結び」

○『広辞苑』[2]「一片の布に千人の女が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫玉を作り、出征将兵の武運長久・安泰を祈願して贈ったもの。日清・日露戦争の頃始まり、初めは『虎は千里走って千里をもどる』の言い伝えから寅年生れの女千人の手になったものという」

○『日本国語大辞典』(第二版)[3]「一片の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ縫って千個の結び玉をつくり、武運長久と無事を祈って出征兵士に送ったもの。千人結び」「虎は千里を行って千里帰る」との故事に由来する。千人針の布には社寺の守札を縫いつけたり、『死線(四銭)を越え苦戦(九銭)を越える』の語呂合わせから五銭・十銭を縫いつけるなどされた。また、虎の故事から寅年の女性は自分の歳の数だけ結び目を作ることができるともされた。こうした風習は日清戦争の頃に始まったとされるが、それが広く普及し、『千人針』の語が一般化するのは昭和期以降」

○『日本風俗史事典』[4]「虎は千里走って千里をかえるという故事から生まれた戦場の弾丸よけの呪い。日本独特の俗信で、日清戦争の頃に始まったものという。白または黄の晒し布に、一〇〇〇人の女性に一針ずつ縫ってもらって結び目をこしらえたものであるのでこの名称ができた。この布を出征兵が腹巻に用いる。第二次世界大戦中には、東京その他の都市の繁華街などで、身内の出征兵のために、幾人もの老若の女性が町を通る同性から一針ずつ縫ってもらっている風景が見られた。『死線(四銭)を越える、苦戦(九銭)をまぬがれる』ということから五銭・一〇銭の穴あき硬貨をその布に縫い込んだり、また虎の故事から、寅年生まれの女性にその年の数だけの数を縫い

込んでもらうと効が多いと言われたりした」

日清戦争から始まったという根拠があるのか、はじめは寅年生まれの女性千人で作られたというのは本当か、など、これらの事辞典の説明だけでも疑問が涌いてくる。

平成十一年の『日本民俗大辞典』[5]に岩田重則が次のようにまとめている。

○『日本民俗大辞典』「千人針　戦時中の代表的な弾丸除け信仰の一つ。千人針と呼ばれる腹巻状(チョッキ、帽子などもある)の布を身につけていれば、戦場で弾丸に当らずに、無事帰還すると信じられていた。日露戦争(一九〇四～一九〇五)中、千人結と呼ばれたものが、後の千人針の原型ではないかと考えられているが、大流行したのは、日中戦争開始(一九三七)直後から太平洋戦争(一九四一～一九四五)期であった。ただし、大流行の終焉は、敗戦と同時であったのではなく、戦争末期の一九四四年(昭和十九)―四五年ごろには、作られていなかったと回想する人もいる。千人針には、その作り方に規則性があり、千人の女たちが、赤糸でひと針ずつ結び目をつくるのが一般的で、時にはこの結び目に「死線(四銭)を越える」ということで五銭玉を、『苦銭(ママ)(九銭)を越える』ということで十銭玉を縫いつけることもあった。また、『虎は千里行って千里還る』ということで、寅年の女だけはひと針ではなく年齢の数だけ結び目を作ったり、虎の絵が描かれることも多かった。このような規則性から考えると、千人針は、戦時下の女たちが出征して行く男たちの無事を祈るために作った呪術的なものであったと思われる。また、年祝いとの類似性も関連するとも考えられている」

現在のところの基本的な千人針についての説明を辞事典をとおして概観してきたが、これらのなかでも千人針の始まりの時期や寅年の伝承についての説明など異なる点がある。

さて、ここで当時の辞事典にはどのように記載され、その千人針に対するイメージが変わってきたかを見ることで、千人針の研究の方向性を確認したい。

満州事変後の昭和八年二月に刊行された『大百科事典』(平凡社)[6]には、藤沢衛彦が解説を次のように書いている。

○『大百科事典』「帛を一針づつ千人の手して結び縫えるものを身に纏えば弾丸を避くるという迷信。(中略。以下『風俗画報』の引用)世界大戦の頃一しきり流行し、昭和七年満州事変後、殊に上海事変当時盛んに各所に行はるるを見た」

とあり、まだ「千人針」の記載はなく、「千人結」という言葉で、すでに当時流行していたことが分かる。

昭和八年十一月刊行の中山太郎編による『日本民俗学辞典』[7]には、

○『日本民俗学辞典』「千人結び　日露戦争中『千人結び』と云ふが流行し、千人に結んで貰った小切を出征軍人に贈り、それを懐中して居ると敵弾に中らぬと云ふのであった(奇態流行史)。近くは千人針として千人に縫って貰ふことが、同じ意味で流行した」

とあり、この時期に「千人結び」から「千人針」という習俗に変わったこと

が指摘され、中山は一応「同じ意味で流行した」と、慎重な姿勢を見せている。

昭和十年九月に刊行された『国民百科大辞典』(冨山房)[8]には、「千人結」と「千人針」の両方の項目があり、「千人結」にのみ次のような説明が記されている。

○『国民百科大辞典』「千人結　日露役中行ハレ、千人ノ女性ニ小切ヲ結ンデ貰ヒ出征軍人ニ贈リ、之ヲ肌ニツケル者ハ敵弾ニ中ラヌトイフ。近ク満州事変ニハ千人針盛行、之モ恰モ雑巾ノ如ク布ヲ千人ノ女性ニ一針宛縫ッテ貰ヒ、前ト同ジ力ヲ信ジタ」

ここでも「千人結」が日露戦争時に行われ、同様の「千人針」が、満州事変で流行したとある。

昭和十四年九月の『時局認識辞典』[9]には、

○『時局認識辞典』「千人針　千人縫ともいひ、千人の女の手でさした布は銃丸も通さぬという迷信より出発し、出征兵士に贈る糸で縫った布片、人通りの多い街頭に女を擁して其の運針を乞ふ所謂千人針風景を現出し、幾多の涙ぐましい美談も生れている」

とあり、千人針の風景が時局を表すものとして定着していることが分かる。

以上、当時の事辞典を簡単に見てきたが、ここで分かるのは、日露戦争の頃に「千人結」と呼ばれ流行し、同様のものが満州事変の頃にも流行し、千人針と呼ばれていたことが分かる。この頃に「千人結」から「千人針」へ一般的な名称が変化したことが予想される。

ここまで事辞典を整理する中で、様々な疑問点が挙げられる。

●日清・日露戦争の頃に始まったとする記述があるが、具体的にいつ頃に始まったのか。

●いつの段階で「千人結」や「千人縫」などの呼称から「千人針」という呼称に集約されてきたのか。

●千人針の起源は人々の間ではどのように語られたか。

●千人針の形態は時代によって変わったのか。

●千人針の流行はどのように広がっていったのか。なぜ全国的に流行が広がっていったのか。

●千人針に付随する様々な俗信は。それぞれいつどの段階でどのように付与されたのか。

これらの疑問点を手がかりに、千人針についてより深い考察を加えていきたい。

これまで、民俗学の分野では、「戦争の民俗」自体があまり取り上げられることは少なかったが、この千人針については、少ないながらもいくつかの論考があるので、先行研究を整理し、今後の千人針研究の課題を明確にしていきたい。

第一章　研究史

民俗学の研究者がこの習俗について言及するのは、千人針の大流行が全国的展開をし始めてから、昭和十二年以降のことである。

「民間伝承の会」による『民間伝承』には、昭和十二年八月の第二巻第十二

号の「会員通信」には、神戸の山田良隆による「千人結び」という事例報告をはじめに、「戦争と弾丸」(第三巻第一号)、「事変と弾丸除」(第五巻第四号)などいくつかの事例報告が行われているが、考察を加えるまでには至っていない。

大間知篤三は、昭和十二年八月付の『東京日日新聞』に「千人針」と題した記事を寄せている。[10] 十二年八月ということもあり、千人針大流行のまっただ中にあるためか、千人針に対しては、「何か私の心に響いてくるものがあった」であるとか、「およそ街頭寄進行為としてこれほど厭な気持ちなしに受けとれるものは少ない」などと思い入れのある言葉が目立つ。千人針の始まりについては、「すでに日清戦争にこれを肌にして出征し、今もそれを保存している人のあることは聞いたし、日露戦争にもやや流行したことがたしか『風俗画報』に出ていた」と日清戦争まで遡れるとし、さらに「日清戦争以前にこれがなかったとは決していえないことであり、むしろどこかの田舎でつつましく行われていたと想像する方があたっていよう」と推測している。その論拠は、千人針が、古来日本に多かった「合力呪願」であり、「今日では古く村を構成した家々の結合力が弱まり、国民的団結がこれに代って現れ」、「村から国への発展というものが、七や三三の数を千という数にまで発展せずにはおかなかったとも考えられよう」という考察であった。しかし、具体的にどの時代にどの地域でこの千人針の習俗が生まれたかは当時であればたどろうと思えばたどれたのではないか。それを似たような例を数例挙げ、「さまざまの古い伝承が織りこまれているということからでも、やはり古くからの日本のものであったといいうる」と、千人針は似たような類例があるので古い習俗であると断定している。この類例から類推するという考え方は歴史史料のない民俗事象について民俗学が用いた手法であるが、このような手法では流行という視点での現代性を扱うことができない。そして、これが民俗学の問題点であり、その後の千人針に対する流行の視点を考慮しない分析の始まりではないか。

大間知に続いて、高崎正秀が、昭和十二年九月に『皇国時報』という雑誌に「千人針古意」を、昭和十五年三月に『俳句研究』(七巻三号)に「千人針考」という論考を収め、その後、昭和三十四年、『古典と民俗学』(塙書房)に加筆採録している。[11]

大間知の文章よりもかなり具体的に千人針について、様々な事例を紹介しつつ論じている。「千人針風景もようやく下火になって、どうやら、これを忌避したからといって非国民呼ばわりをされた、一時ほどの興奮を喚起しなくなって来た昭和十五年の頃の話」という出だしで始まる「千人針考」では、「名称」として、千縫い・千人縫い・千結び・千人結び・千人瘤・千本針・千勝針などの呼称について、また起源については「私の得た愛知県小牧町地方からの報告によっても、日清戦争の時は盛んに行われたが、以前には余り聞かないことであったとある」と日清戦争の頃に行われていた事例を報告している。この他、口で糸を切る事例や、上海事変の時、名古屋で鬱金の布に緑色の糸を用いた千人針が大多数であった事例、寅年のみならず辰年の女性も年齢の数だけ結んでよかった事例など、豊富なバリエーションを提示している。にもかかわらず、結論としては「未婚の少女に結んで貰うのが一番効果的であるというものが目立つ。これが重要な一つの解決の鍵である」と折口信夫の発想を参考に、「千人針が、結局一の紐結びの形式を追うものであり、これの一時代前の古い呼び名が千結びであったらしく、これが神秘の呪力を有する女性によって、十字に縫われ、玉結びせられねばならぬ理由には、かくの如き遠くして長い魂の緒信仰の伝統が存したのである」と、古代信仰へと思い

をはせている。さらに寅年の女性が最も尊重される理由として、いくつかの例を取り、「千人針の持つ意義を解剖してみると、ほぼ以上のような古代信仰に発していることが訣る。文献には見えなくとも、突如として日清戦争の時に起り得るような信仰ではなかったことは断言出来るであろう」と言い切り、その豊富な事例を斬りすてて、大間知の所説を認め、その文章を締めている。

柳田国男は、ほとんど千人針について言及することはなかったが、唯一触れている文章としては、「人が独りの力ではどうすることも出来ぬことでも、多数の志を集めるならばなんとかなるということを、千人針というものはよく認めて居る。しかしそこには人間以上の高くすぐれた御力があって、我々の願いに応じて下さるという信頼は無いのだから、是もなおまじないの一種でしか無い。日本人の曾てしっかりと持って居た信心は、決してそんなものでは無かった」と、『村と学童』の「千駄焚き」に記しているが、書かれたのは空襲下のなかだったようである。千人針も下火になった時期であったからか、千人針に否定的な見解を示している。その理由はおそらく直感的にこの習俗の本質が古来の民俗文化に起因するものではなく、流行にあることを読んでいたからではないか。[12]

歴史学の視点からは、大江志乃夫が「〝徴兵よけ〟の神から千人針まで」と題し、徳島県吉野川中流域の調査をもとに徴兵制に対する民衆の意識の歴史を考察している。日露戦争時に、十五年戦争時の千人針と同様の習俗が、「千人力」と呼ばれ行われていた事例を根拠に「後世の千人針とおなじ形式のものが日露戦争時に存在した事実が史料的に確認できるのは、管見によれば、現在のところ徳島県下の「千人力」だけである」として考察しているため、「のちの昭和十五年戦争時代とはちがって、公然と行われたわけではないと思われる」と、論の展開に無理がある。冒頭の辞事典の事例をみても少なくとも日露戦争時には流行していたことが明らかである。ただ、徴兵除けや弾丸除けの系列に千人針を位置づけ、その違いを考察した点は、千人針研究に重要な示唆を与えている。[13]

文化人類学の視点から大林太良は、「女軍と千人針」という項目で、「千人針も結局は、一つの紐結びの形式を追ったものであって、古い呼び名が千結びといったのも、また女性によって結んでもらわねばならなかったのも、古代の玉の緒の伝統を引いたものであったからである」と述べ、千人針の本質を古代信仰に求めている。[14]

その後、千人針について言及されることはなかったが、岩田重則が千人針について積極的に論じることとなる。[15]

岩田は、千人針の歴史について、「現在、確認でき得る範囲では、日清戦争においては、確認することはできず、日露戦争（一九〇四年二月～一九〇五年九月）のときからである」とし、日露戦争時の事例を挙げ、「その後、管見のかぎりでは、第一次世界大戦（ドイツ領青島・南洋諸島など攻略）、シベリア出兵、満州事変に際しては、「千人結」ないしは千人針の流行についての記録は、ほとんど見ることができない」とし、千人針の論考は、その後の日中戦争開戦後に分析の中心がある。しかし、少なくとも前述の高崎正秀は満州事変での流行に言及しており、千人針の流行を論じるには収集事例が少な過ぎるのではないか。日露戦争と日中戦争の間の事例を分析すること、可能であれば日露戦争の以前のどの段階で千人結の習俗が成立してきたのかを考えることが千人針の本質を理解するには重要なのではないだろうか。

岩田は、「日中戦争がはじまる前と後では、千人針の大流行に大きな違いがあったのである」とし、「寅年生まれの女は、年齢の数だけ結び目を縫うことができる」という俗信と死線（四銭）・苦線（ママ）（九銭）を越えるという

俗信が、「日露戦争の『千人結』の記録ではみることがなかった」としているが、今後検証する必要があろう。また日露戦争中に「その基本形は、女たちによる弾丸除け祈願にあった」が、「弾丸に当たらずに無事帰ってきてほしいという願いは、日中戦争以降二重になり、強い願いとして存続するようになった」とする。その後、様々な戦争をめぐる弾丸除けや武運長久の祈願が大流行を見せた事例を挙げている。また、女学校で千人分の千人針を作った例などを挙げ、「このような既製品や大量生産によって、千人針が作られたあと」「十五年戦争の終わり近くには、召集があまりにも日常的になったためであろうか、あるいは、本土爆撃が日常茶飯事になり、出征者のみならず「銃後」の人々の生命さえも危うくなったためであろうか、いずれにせよ、千人針は消滅したのである」とする。このように千人針の流行の流れについて、推論しているが、断定するには事例が少なく、もっと各地の事例を挙げ、時代とともにどのような流行の衰微を示したかを論証する必要があろう。

この後、「千人針というこの奇妙なモノが、民俗学的に、どのような意味を持っていたのか」について、「千人針は、単にひとりの女による呪術であったのではなく、そこには、千人の女たちが一針一針縫うことによって力を合わせ、より強く異郷の戦地にある男たちを守ろうとする、〝妹の力〟の集中が行なわれていたのであった」、また、大間知の提示した〝赤のフォークロア〟についても推論をしている。しかし、このような、民俗的類例を根拠に、民俗事象を分析すると、それに当てはまらない事例を無視せざるを得なくなる。また、数多くの類例をその背景に持つ必要があり、そうでなければ似たようなモノを思いつきで並べているに過ぎない。

「千人針」というツールの持つその時代に込められた意味を探り、なぜ人々が千人針の流行を受け入れたかを考察する必要があろう。

また、岩田の論考には、根本的にいつから「千人結」が始まり、どのような経緯で、日中戦争勃発とともに爆発的に全国へ広がったのかについては説明されていない。あたかも千人針が長い年月をかけて全国に広がっていった他の民俗事象を分析するかのような取り上げ方である。しかし、この千人針という習俗には、日露戦争の時代から流行として人々に理解されていたわけで、その流行がどのような理由で広がっていったのかを分析することが民俗学の可能性を広げるのではないか。

以上、千人針についてのこれまでの研究をまとめてきたが、「戦争の民俗」研究の中での千人針研究の重要性について二人の研究者が指摘しているので、それについて整理しておく。

まずは千葉徳爾が、『民俗学のこころ』で「戦争と民俗」として「千人針」と「氏神出征」について触れている。[16] 千人針については、前述の『民間伝承』の山田良隆の報告をもとに、「多数が力を合わせることで特定個人の生命力を延長することに作用しようとする呪術が、ムラの民俗から発生しつつ、国歌[国家?]活動としての戦争にまで応用されてゆく形を認めることができるでしょう。しかし、その形に本来のムラ共同体の姿の残るところでは、やはりムラで形成された協力の意識を残して、大勢の力をかりて個人に勢力をつけ加えるという意味が考えられるのです。ところが都市の相互に顔を見知らない群衆の中に入ると、その意識が次第に変わってゆくことに山田氏は注目しています」とし、「ムラ共同体の仲間意識による協力方式は、『山村生活の研究』など、当時の全国的資料によっても関東から九州まで各地にみられ、それが仲間意識の拡大としての国家と結びついたのが千人針であったといえそうです」とまとめている。

次に川村邦光は様々な視点から戦争の民俗について積極的に論じてい

るが、「戦争の民俗学」[17]において、『民間伝承』のなかで戦争の民俗について研究されなくなった経緯を分析しつつ、千人針についても触れている。昭和十二年の『東京朝日新聞』の記事を紹介し、「これらが街頭千人針のはじまりかどうかは分からないが、この新聞報道以降、他の新聞・雑誌にも取り上げられ、マスメディアが千人針という〝戦争の民俗〟を作りあげ、全国に流行させていったといえよう」とマスメディアと千人針の流行について指摘している。

これまで千人針の研究成果を見てきたが、少数の事例を元に、様々な民俗習俗との類似点を指摘するにとどまっていることが多く、新しい習俗であるためか実証的に事例や文献資料の紹介がされることが少なかった。今後の研究課題としては、これまでの流行を無視した民俗学的分析を保留し、千人針の始まり、成立、展開、全国的大流行、そして衰退という流行の展開としてとらえることが必要だと考える。

本稿では、以上の研究史をふまえ、まず序論として、千人針の始まりと展開について資料を分析する。様々な課題については、追って事例とともに提示していきたい。

第二章　千人針の始まりと展開

一、千人針の始まり

1、くじ逃れから弾丸除けへ

明治政府は廃藩置県の後、次々と国家としての近代化政策をすすめ、明治六年（一八七三）一月十日に徴兵令が布告された。当初は多くの免役条項があったが、明治十六年十二月には、徴兵令の全面改正が行われた。そのような中、庶民の間には「徴兵逃れ祈願」が行われるようになった。喜多村理子によると、[18]

（前略）大勢の若者の中から選抜する徴兵制度の仕組そのものが、限られた若者とその家族に大きな負担を強いるという結果をもたらし、人々の間に「徴兵されるのは貧乏くじ」という不公平感を広く植えつけていた。（中略）徴兵されることを内心逃れたい若者と、愛する息子であり大事な働き手でもある若者を兵士にとられたくない家族。その個々の願いをムラ共同の願いと位置づけて、ムラの全戸が参加するかたちで徴兵逃れ祈願の山籠り・宮籠りを行っていたムラもみられた。（中略）軍国主義が強まり、いままでムラの内部では平気で語られていた、息子や夫を「兵隊にとられたくない」ということばは無論のこと、あらゆることばにカセがはめられていった。そのような外圧による言論統制のほかに、兵士の家族とそうでない家族がムラという狭い空間でともに居住しなければならないという事情が、前者には不公平感を、後者には負い目の意識をもたらし、『兵隊逃れ』という願いがムラの中で共有されなくなったのである。[19]

日本でも徴兵制度がしかれるようになると、兵役逃れの習俗が増えたことはよく知られている。徴兵制度が厳しくなった明治十六年頃からは、ある種のあきらめ、戦地へ行かざるを得ない状態が生まれたが、むしろ愛国思想が芽生え始め、積極的に戦争へ参加する気運が高まった。そのようななか、残された妻や母は、地域の氏神へ参拝し、無事に戻ってこられることを祈願し、無事に帰ること、戦地での無事を祈ってお守りを持たせることが第一に出来ることであったであろうことは十分想像

できることであろう。それがどの段階で、自分だけではなく、他人をも巻き込んだ千人結という習俗に取って代わられたのだろうか。普通に考えれば、残された妻や母の信仰心を強めることがその祈願を強さを強める方法であるはずである。

本来、個人的な祈願であった弾除け祈願の習俗が千人という大規模な強力祈願にすり替わったのか。流行とは、その時々の世相や社会情勢に合わせて、人々が必要とするかたちで広がる事象であるとすると、そこには仕掛けた存在があるのではないか。これまであたかも自然発生的に民俗文化の中から生まれてきたかのような分析をされてきたが、それほど古い流行ではないのだから、その始まりの段階を丹念に研究する必要があると考える。千人針とは、祈りを込めたお守りの延長という意味の他に、こうした戦地に送る残された女性を一人にしておかないですむモノを作りたい願望から始まった流行なのではないかとも考えられないだろうか。そして、けっして「貧乏くじ」ではないと言い聞かせるための、戦争を肯定するための画期的な道具として生まれたのではないか。

以上のような視点を前提にこれから明治期の千人針の事例を見ていくこととする。

明治期の千人針に関する事例を集めてみると、当然のことながら戦時中の事例がほとんどであり、戦争ごとに事例を整理する。

2、日清戦争の頃

明治二十二年(一八八九)には徴兵令が改正され、「忌避者優先徴集の処置をとってからというものは徴兵を忌避することが困難となり、多くの青年はいやおうなく兵営につれこまれた」[20]とあり、合法的なくじ逃れができなくなり、神仏への祈願、出征が決まり、戦争が始まれば、弾除け祈願が行われた。そのような状況の中、日清戦争は、明治二十七年七月から翌年の四月まで、約十ヶ月間続いた。

前述のように『広辞苑』には、千人針の始まりは、「日清・日露戦争の頃始まり」とあるが、そのような資料を根拠にしたのであろうか。そのあたりからまず見ていきたい。

昭和十二年八月の『東京日日新聞』に大間知篤三により「千人針」と題した記事が掲載された。[21]

> 千人針は何時からはじまったか。すでに日清戦争にこれを肌にして出征し、今もそれを保存している人のあることは聞いたし、日露戦争にもやや流行したことがたしか『風俗画報』に出ていた。名称は千人結びといったらしい。しかしその時には、満州事変の際や、ことに今日ほどに流行しなかったことは、記憶している人のきわめて少ないことからでも想像しえられる。しかし日清戦争以前にこれがなかったとは決していえないことであり、むしろどこかの田舎でつつましく行われていたと想像する方があたっていよう。

「すでに日清戦争にこれを肌にして出征し、今もそれを保存している人のあることは聞いた」という記述があるのみで、具体的には説明がない。さらに想像として日清戦争以前にも「どこかの田舎でつつましく行われていた」と推測するに過ぎない。

この他、高崎正秀が昭和十五年三月「千人針考」(『俳句研究』七巻三号)[22]に、「私の得た愛知県小牧町地方からの報告によっても、日清戦争の時は盛んに行われたが、以前には余り聞かないことであったとある」と聞き書きの報告を掲載しており、今後、日清戦争の頃に千人針の習俗が行われ

ていたかどうかの手がかりであり、追跡調査が必要であろう。この後、北清事変(明治三十三年六月〜三十四年九月)が起こるが、この時期の事例は確認できなかった。しかし、この後、紹介するように日露戦争の頃にはかなり具体的な事例が各地で見られることから、日露戦争以前にすでに行われていたと考えるのが妥当で、今後この時期の資料のさらなる発掘が必要であろう。

二、千人針の成立

1、日露戦争の頃

日露戦争は、明治三十七年二月から明治三十八年九月まで、朝鮮半島と満州を主戦場として行われた。日露戦争の時期になると千人針について様々な資料が散見されるようになる。

まず、明治三十七年四月二十四日付の『読売新聞』朝刊一面には、

事例①

或る土地では婦人が通行すると、針と糸と白い布を持った兵士が幾人も出て来て、一針で可いから、縫いとりをして呉れと頼むので、婦人は大に五月蝿がって、用事でもなければ成るべく外出しないことにしているそうだ。これは千人の女に一針づつ縫いとりをして貰うて、それを肌に巻きつけていると、鉄砲の弾が中らないという迷信から出たのであるそうだ。これで見ると、一万人の婦人に縫いとりをさせて、軍艦へ貼りつけて置けば、砲台でも何んでも恐ろしくないわけだ。(傍線筆者)

この記事では、まだ「千人結」などの呼称がなく、白い布に針と糸で縫いつけていたこと、この時期には千人針は積極的に信じられているわけではなかったことなどが分かる。

続いて明治三十七年七月一日付の『読売新聞』朝刊三面には、

事例②

流行遅れの千人結　開戦当時大坂より始まりて追々各地に流行せる千人結びは遅れ馳せにも昨今府下にて大流行出征軍人の家族等は兎に角鉄砲玉を除ける禁厭なれば千人結を拵えて戦地へ送り届けんものをと、例の寅年生れの四十歳以下の女千人より真心籠めて真紅の色もて布に結び付け貰うとの方法にて苟めにも寅年の女千人を探し当てるは容易ならねば先づ浅草観音は婦女子の参詣する者多きを見込みて毎日五六人の母とも見ゆる老婆や妻とも思はるる婦人等が参詣の婦女子の袖に縋りて其年を問いつつ彼の真紅の糸を布に結び付け貰いけるを見受けられ陸軍省には諸方より送達方を届け出たる千人結は山の如く積めるほどなりと(傍線筆者)

とあり、「千人結」と呼ばれ、日露戦争開戦時に大阪から始まり、遅れて東京にも流行してきたことが分かる。寅年生まれの四〇歳以下の女性千人から真紅の糸を布に結びつけてもらう方法であったが、寅年の女性を捜し出すことは容易ではなく、浅草観音では女性の参拝客が多いということで、毎日、五、六人の母親や妻が参詣中の婦女子に年齢を尋ね赤い糸で布に結び目を付けてもらっていたことが分かる。陸軍省にはあちこちから届けられた千人結が山のようにあったとあることから身内のためだけに作っていたわけではないことが分かる。

明治三十八年五月に刊行された『風俗画報』三一六号には、画報生「千人結」として次のような記述がある。[23]

事例③

千人結とは誰かいひ始めけむ。彼是れ民間に伝りて今尚ほ行はるそは何事なるやといふに。一片の布帛をば一鍼づつ千人の手して結ひ縫ふことにて。かくしたるものを身に纏へば。弾丸を避くるを得べしといふ。所謂まじなひの類にて。迷信家より起こりしものなるべし。思ふに千人の女髪は大象を繋くを得べしといふが如く。千人の丹誠を籠めたる布帛は。弾丸も之を洞する能はずとの観念より出しものにや。此事浪華辺より流行し来りて東京にても実際に之を行ふものあるを目撃せり。大抵依嘱するものは婦人にて。依嘱せらるるものも勿論婦人なりとす。親戚知友に請ひ一鍼つつ縫ひ貰ふも。固より千人に及ふは容易ならさることなれば街路に出て婦人の来るに会へば之を請ふ。請はるる者も出征軍人の為めなりと心得て。快よく諾ふを常とす前にもいへる如くこの千人結というふはもと迷信より起りしものにて一笑すべきことなれども只管(ひたすら)に我子を思ふ親心を察し見れば亦人情の免れざる所なるべし。(傍線筆者)

事例②と同様に、千人結と呼ばれ、大阪(浪花)で流行したものが東京でも行われるようになったことが分かる。

以上、日露戦争当時の記事を紹介したが、次に後年になって日露戦争を振り返った記事の中に「千人縫」「千人結」について書かれている部分を紹介する。

大正元年(一九一二)十月刊行の『日露戦役　婦人の力』(松本恒吉著、洛陽堂)に、日露戦争の南山の戦いの後、明治三十七年六月、戦場で亡くなった兵士たちを弔ったある兵士の報告に次のような記述がある。[24]

事例④

斯くて自分は差図して遺物たるべき貴重品を探させて見れば、両親の写真を持つあり、お守札を身に着くるあり、千人縫ひの腹巻を為したるあり、是等をみるにつけても情緒寸断する思ひであったが、更に膚に着たる真綿のチョッキを見ては、之亦最愛の母が一念込めて作り為したるものでないかなぞと考へて、いつしか自分は唯涙にむせぶのみ

両親の写真、お守り札とともに、「千人縫ひの腹巻き」を肌身に付けた者がいたことが報告されている。

大正二年一月に刊行された桜井忠温著『銃後』には、明治三十七年八月に参加した日露戦争での経験談の中に「千人結び」についての記述がある。[25]

事例⑤

兵隊で千人結びといふものを持っているものが非常に多かった。動員の前後に、停車場や町の角の多勢人の集まっているところで、手拭くらいの大きさの白い布と針に糸を通してあるものとを出して、「御面倒で御座いますが、お願い致ます」などと一人づつひとりづつ、糸を通して結目をしてもらっているのを見たことがある。そうして之れを結ぶのは女に限っており、千人の女が結ぶのだそうだ。甚だしいのは、女学校の門などへ持って行って、生徒の帰りを待ち

受けているものもあった。此の千人結びは何にするかと思うと、弾避けになるのだそうである。腹巻にもしたり、服の裏へも縫い付けたり、襦袢の上へ襷にもしたりしておった。（中略）この千人結びで可笑しかったのは、予の連隊で戦死の魁をやった何某という兵が、血まみれになって担架で担がれて山から下りて来たとき、この千人結びが担架の外に垂れているのを見て、イヤ千人結びは危いと、俄かに評判が悪くなって、誰いうとなしに、コソコソと取って捨てたものもあったようである。折角女千人が一心を籠めた、弾の中らぬという重宝なお禁厭が、どこにもここにも棄ててあった。（傍線筆者）

『早川貞水師講演　教育講談　愛国心千人針』

多く兵隊が「千人結び」を持っていた。とあることからある程度の流行であったことが分かる。手拭くらいの大きさの白い布を使っていた。ある兵士が、血まみれになって担架で担がれて山から下りて来た時、この千人結びが担架の外に垂れているのを見て、千人結びは危いと、にわかに評判が悪くなって、コソコソと取って捨てたことがあったということから、流行はしていても、それほど信じられておらず、まじないの一つにすぎないと考えられていたのではないか。この著書は、「銃後」という言葉の初出に当たる文献であり、この書物の中での千人針の意味づけも調べる必要があろう。ちなみに、五銭と十銭を結びつける習俗が「十五」＝「銃後」という説明をする人もあり、この習慣が「銃後」という言葉の成立以降に始まったと考えられる。

大正四年（一九一五）五月刊行の『早川貞水師講演　教育講談　愛国心千人針』（早川貞水著、大江書房）に明治三十七年七月四日、東京の新橋駅の街頭で千人針を乞う老婆のエピソードが紹介されている。[26]

事例⑥

其の今、大山閣下の御馬車が停車場に著きまする少し前、年の頃は六十三四になりまする老婆が「おばこ」に髪を結んで、鬢の毛は左右に垂れ、洗いざらした粗末な単物を著て、心の現はれて居る如何はしい帯を締め、草履だか下駄だか分からないような、歯の減った薄い下駄を穿き、手には四五尺ばかりの白木綿と針と糸とを持って、汗ビッショリ発いて、其の大勢の人込の中を割って、御婦人と見ると「モシモシ」と声を掛け、美い服装をして総指揮官、参謀総長閣下を御送りしようと云って来て居らるるお御方を呼留める

断った女性を見て、書生が私でもそれくらいは縫えると言って、縫お

うとするが、おばあさんは女性だけしか縫えないと断った後に、愛国婦人会の総裁閑院宮妃殿下をお出迎えした女性の袴をつかんで「私の倅が明日、戦争に参るのでございますが、千人の婦人の御方が一針づつ縫いましたものを締めて参ると、敵の玉が当たらないと申しますから、あなたも一針御縫い下さいまし」と声を掛けた。その様子を見た宮様にも一針縫っていただいた。「あの御方御一人の御縫いくだすったのは、普通の人の千万人にも当たる位のものだ。もう他の人の手に渡すと畏れ多いから、そのまま早く家へ帰って息子さんに話すがよい」と助言を受けた。その後、息子は戦地へこの千人針を持って出征する。戦地ででの息子の様子などを語った美談が紹介されている。

この文献が管見のところ、「千人針」と言う言葉の初見である。日露戦争の時には、千人結と呼ばれていたものを「千人針」と呼ぶように方向性を変えた著書として大変重要な文献である。

○昭和十二年(一九三七)九月、若井積「随筆　千人針の思ひ出」では、筆者が、明治三十八年(一九〇五)三月十日、奉天陥落の朝のことを次のように記している。[27]

事例⑦

その時、その軍曹は、ポケットから何か出してくれと頼むようにするので、探り出してみると、それは方一尺位の布片で、黒木綿糸でブスブスさしてある雑巾ようのものでした。

近頃『千人針』について、赤糸の結び目にしらみが卵をうむから不衛生だとか、赤糸は血が流れたようにしみるから白糸がいいとかいう議論を聞きますが、日露戦役当時私の見た「千人針」は此頃のように大きなものでなく雑巾位の大きさでした。そして一人が一結びしなければならぬというものでもなく、誠意をこめて一針づつ縫うたところに意義があったもので、その布の大きさとか、縫糸の色合などは全然関係ないように思われます。(傍線筆者)

以上、日露戦争の頃の千人針について資料を当たってきたが、まず、日露戦争の戦時中の記録では、次のようにまとめることができる。

●管見の所、事例①明治三十七年四月二十四日付『読売新聞』の記事が千人結についての最も古い記録となる。その段階ではあまり理解が得られていない。

●開戦当時は大阪で流行しており、七月の段階ではすでに流行遅れとなっていた。

●「寅年の女性」という条件はすでに見られるが、「五黄寅年」などのその他の俗信は付加されていない。

●手拭いくらいの布などに糸を結び、身につけるとあり、胴巻などの表現は出てこない。

2、満州事変の頃

満州事変は、昭和六年(一九三一)九月に勃発し、翌年三月に一応の停戦を迎える。

○昭和六年十一月十九日付『朝日新聞』朝刊七面「弾丸除けの腹巻」

事例⑧

【新潟電話】弾丸除けには五黄寅年生れの千人の処女の手で縫われた腹巻がよいからと新潟市立女子工芸学校へ盛んに頼みに来るので同校では県立、市立の各女学校に応援を求め一週間以内に同市出身兵

土七十九名全部に千人縫の腹巻を贈る事になり十八日森教諭が市役所へ送付方を申出た。（傍線筆者）

「五黄寅年生れの千人の処女」とは、具体的に大正三年生まれで、昭和六年の段階で、満一七歳を迎える女性のことである。「五黄の寅」の女性は、「性質寛仁で、運気が強い」[28]とされることから、黄色の布や虎の絵が描かれるようになったのではないかとも考えられるが、今のところ、この新聞記事は「五黄の寅」の事例の初出である。さらにこの伝承が遡れるとすれば、その前の「五黄の寅年」生まれの女性は、明治十一年生まれの女性となり、日清戦争開戦の明治二十七年には、満一六歳を迎えたことになり、日清戦争の時にも「五黄の寅年」の事例があったことは十分考え得るのではないだろうか。

○昭和六年十一月二十七日付『朝日新聞』朝刊一一面「列車中で胴巻」

事例⑨

【千葉電話】二十六日の昼房総線の列車中でサラシをだした五六人の女学生「満州の兵隊さんに贈る弾丸除けの胴巻です一針縫って下さい」と持まわると忽ちいくつも胴巻が出来上がった、女学生は千葉市の学校に通っているものらしい

○昭和六年十二月二日付『読売新聞』夕刊二面「雷門に四少女　『千本針』の願い　巷に満つる後援の真心」

事例⑩

一日朝から雷門に現れて満州軍の弾丸よけの腹巻をつくるため白木綿に千人針の願い、行人の足を止めて誰かれが一針づつ刺してゆく

○昭和六年十二月十日付『朝日新聞』朝刊三面「銃後の者」

事例⑪

◇いづれの視野に立てる人々にせよ、現実、極寒と窮乏の中に苦闘する人々を想ってそれを助ける心を持つ事は、人間的本性であり義務である。今や一兵士当り二十六本づつの歯ブラシが渡る程にこの義務の遂行は遺憾なく行われているという。◇然し、ともすれば理性が感激によって鈍化される事はあり勝ちなことである。この寒空に夜のふくるのも忘れ、ひたすら民族的衝動に駆られて奔走する一群の可憐な少女達を自分は見た。彼女等の手にしているのは一枚のフランネル、その行人に求むるところは、二つ欠けるも一つ増すも許されぬ一千回の縫針だという。昔から千人の女が縫った腹巻は弾丸除けに不思議な効目があるといわれますとある。◇何人も彼等の情熱的行動に対して冷笑を向ける事はしない。否社会的重大事の応急対策に伴う余興的行為として、一応はその存在理由も首肯出来るのだ。然し今やこの意義多き運動が全国的傾向となって、賢明なる婦女子は目抜きの街頭に必ずや貴重な数分を割く事を忘れない。そして、死線にさまよう派遣軍に対しての国内的義務をしとげたという自慰に充ちて得意然と家路につく。◇それが実際的効果のある事ならわれわれは何もいえない。然し今も昔も弾丸は物理的法則に従って飛来すると同様に、迷信も日露戦役の時代と同一の迫力を以て昭和人の精神を支配しているかも知れない。ただ我々は、千本針の腹巻をかけていたにもかかわらず、鉄甲を与えられなかったために殺られたという戦死者の遺骨がとどくのを、きょうきょうとして恐れるのである。（傍線筆者）

○昭和七年二月『アサヒグラフ　昭和七年二月五日　臨時増刊　満州事変写真全輯』朝日新聞社[29]「国民の熱誠」というページに「千人針」という項目で「高岡市にて」「呉市にて」「東京市にて」「岡山市にて」「広島県増川高女生たち」「奈良県御所高女生たち」と説明のある写真が六点掲載されていることから、すでにこの時にはかなり全国的な流行を見せていることが分かる。

○昭和七年二月二十九日付『朝日新聞』朝刊三面「千人針の追撃」

事例⑫

浅草仲見世の二百メートルは針と糸とのざんごう地帯。戦地の兵隊さんに贈る弾丸除けの胴衣を縫うため文字通り一騎当千の群――千人針が参詣の女群を追撃する、参詣人はこの渦巻に巻こまれて老も若きも女性のすべては針を握ってたん念に縫継いで行く「そう、お父さんの腹巻―感心ねえ」と始めのうちは糸切歯で無器用に糸をかんでいたモガも、一人に二へんとして百からのざんごうだと都合で二百ぺんからの歯痛ではたまらぬと計り駆足で観音堂内に逃避すれば、その先にも又伏兵(?)だ、今市内では大通りや駅前で夜おそくまでこうした千人針の風景が見うけられる。（傍線筆者）

日露戦争での『風俗画報』の口絵の例同様ここでも浅草仲見世が千人針のメッカであり、ここでは結んだ糸を糸切り歯で切っていたことが分かる。

○昭和七年三月十日付『読売新聞』朝刊七面「京阪の戦時異変　支那趣味の没落　ニセ廃兵と千人針利用のスリ横行」

事例⑬

更に嘆かわしい現象は最近日毎に増した千人針の人込を利用して真心を込めて縫う婦人達からスリを働く悪漢の激増した事で市内に毎日廿数件に及んでいる、街頭には婦人の「千人針」に対して男子の「千人力」「千人忠」「千人大」などの進出目覚ましくこれは一枚の紙上に墨で力、忠、大などの字を千人の男子に書いて貰い之を肌身に付けて居れば千人の力と忠を一身に集めるので一人で千人の敵に匹敵し得るとの趣向だがこの所千人針戦線も紅白とりどりの賑かさで何れも軍国ならでは見られぬ面白い光景を現出している

ここでは千人針だけでなく、千人力・千人忠・千人大という男性版の千人針も登場している。

○昭和七年三月十日付『読売新聞』夕刊二面

事例⑭

「軍国と女性」と題して、「学窓を出る女学生座談会」の内容が掲載され、その中に「また私としてしましたことは、お隣の方の御親戚に当る方がやはり満州へいらっしゃるということで、一針でもいいから千人針を縫ってくれといっていらっしゃいましたから、私、沢山縫ってあげようと思いまして、学校へ持って行ったりして四百針ぐらい縫いました」「それから裁縫学校、これは私どものお姉さまのようになっている学校ですから、千人針をよく頼みにいらっしゃいます。それで大抵一日一枚ぐらいづつは、クラスを廻して拵えることになっております」「私たち五年生は五黄の寅年が多いといって持ち込まれますのでお遊びの時間は千人針を縫う

のが仕事のようですが、皆もう我れも我れもと、我れ先に一針でも余計に縫ってあげようという気持ちで、これは私たちとして嬉しいと思います」(傍線筆者)などの発言が見られる。

短時間に千人針を仕上げるには、女学校は特に重宝されたことが分かるし、ここでも「五黄の寅年」生まれの女性の力が頼りにされていたようである。「五黄の寅年」という条件を短期間に多数見つけるのに効果的なのは女学校であったことは容易に考えられ、「五黄の寅年」の俗信と女学校の関係は今後分析の対象になってくるであろう。

○昭和七年三月十五日、『読売新聞』夕刊三面、平山蘆江「花柳百話」

事例⑮

姐さん、私も千人針の腹巻というのを作って来ましたわと、赤糸を隙間なくかがった腹巻をお座敷から持ってかえる。おや、お前さん、さらしを切ったのはけさのようだったが、もう出来たのかえと、姐さんの聞けば、え、早い方が好いと思ったから、今夜、お座敷で、お客様にすっかり刺して頂きましたという。冗談じゃない、これは女の手でなければ駄目なんです、と云われて、あらそう、それじゃやりなおすわと、今度はその夜の中に自分の手で、そっくり糸をかがって、それ出来ましたという。まア、何てこの人は呆れた人だろう、千人の手で縫うから千人針です、一人で縫っては何にもなりません。それにしても、一体その腹巻は誰にしめさせるのと聞けば衛成病院に負傷兵の方が見えているそうですから、あした持ってゆくつもりでした。

説明無しに三段落ちが付けられていることから千人針がどういうものか、一般に知られていたことが分かる。

○昭和七年三月十九日付『大阪朝日新聞』

事例⑯

『銃後の女性起て』と国防婦人会誕生　―千人針の無関心に奮起　大阪できのう発会式

できるだけ多くの千人針を贈らんと寒い街頭に立ったが道行く婦人十人のうち七人までは面倒臭げに袂をふり切って一瞥もくれず通り過ぎたのに憤激していた折も折、大阪防空運動が起りこれに刺激され、(中略)国防思想普及のため全市に組織を拡大する。[30]

千人針が一つのきっかけとなって、国防婦人会が発足することになったことが分かる。このことは千人針の発足と婦人会の関係として後述する。

○昭和七年四月、寺田寅彦「千人針」(『セルパン』昭和七年四月)[31]

事例⑰

去年の暮から春へかけて、欠食児童のための女学生募金や、メガフォン入りの男学生の出征兵士や軍馬のための募金が流行したが、これらはいつの間にか下火になった。そうしてこの頃では到る処の街頭で千人針の寄進が行われている。これは男子には関係のないだけに、街頭は街頭でも、何となくしめやかにしとやかに行われている。それだけに救世軍の鍋などとはよほどちがった感じを傍観者に与えるものである。如何にも兵隊さんの細君らしい人などが赤ん坊を負ぶっているのに針を通してやっている人がやはり同じ階級らし

いおばさんや娘さんらしい人であったりすると実に物事が自然で着実でどうにも悪い心持のしようがない。そうした事柄が如何にも純粋に日本的だという気がするのである。迷信だと云ってけなす人もあるが、たとえ迷信だとしてもこれらはよほどたちのいい迷信である。（中略）

日清日露戦争には厳島神社のしゃもじが流行したように思う。あれは「めしとる」という意味であったそうである。千人針にもついでに五銭白銅を縫付け「しせんを越える」というおまじないにする人もあるという話である。これも後世のために記録しておくべき史実の一つである。いずれにしても愛嬌があって、そうして何らの害毒を流す恐れのないのみならず、結果においては意外に好果をも結び得る種類の事柄である。これに反してどんなにもっと恐ろしい色々の迷信が今の世に行われて、そのためにどんなに恐ろしい害毒を流しているか、そっちの方が実に大切な問題だという気がする。国家国民の将来を危うくするような迷信が眼前の日本に流行してはいないか。よくよく心を落付けて反省してみなければならない。（傍線筆者）

千人針風景が定着した様子がうかがわれる寺田寅彦の文章である。後半には「死線（四銭）を越える」という俗信がすでに見られるが、「苦戦（九銭）」は見られない。

昭和七年七月十九日付『大阪毎日新聞』には、「直ちに千人針奉仕を開始。大阪府知事夫人肝煎で近く結団式」と題した記事がある。

○事例⑱

北支の風雲急を告げる時可愛い乙女達の心にも銃後の花として「国を守りましょう、兵士を慰問しましょう」というやさしく強い熱情がほとばしり大阪ではじめての愛国子女団が結成されることとなった。[32]

以上、満州事変の頃の事例を整理してきたが、ここでの事例の特徴として以下のことが挙げられよう。

- 日露戦争では「千人結」と呼ばれていたものが、次第に「千人針」に定着してきており、全国的にもこの流行は広がり、男性版の千人力など各地で様々なバリエーションも見せている。
- まだこの時期には、「虎は千里走って千里をかえる」という説明は為されず、「五黄の寅」の伝承の方が先行していることが分かる。
- この時期には「死線（四銭）を越える」という俗信がすでに見られた。

3、婦人会の関与

明治期において、くじ逃れから身近な民俗神への個人的な弾除け祈願、そして集落単位の合力祈願、そして千人結へとその祈願行為が変換されていくことを確認したが、それまでの個人祈願や合力祈願と、千人結が大きく違うのは、女性に限定していることと信仰を伴わないことの二点である。

千人結を完成させるには、まず、千人の女性の存在が必要である。千人の女性がいる場所といえば人混み、つまり都市的空間、あるいは女性のみの集団、婦人会・女学校も想定できる。妻や母が弾除けの祈願をする上で、個人の信仰を強める方法がとられるのが従来の民間信仰のあり方であるが、千人結の根本は、出征兵士の妻や母への周りの女性の理解の強さである。その意味は、自分の身内だけが貧乏くじを引いたという

感情を起こさせないためにはもってこいの祈願ツールと考えられるのではないだろうか。そこで、婦人会の成立を見ていくと、千人針の流行が日露戦争と満州事変で符合する。

明治三十四年(一九〇一)二月六日、愛国婦人会は、北清事変を契機に皇族・高級将校婦人などを中心に我が国最初の全国的な軍事援護団体として発足した。そして明治三十七年二月に日露戦争が勃発。開戦後の出征軍人送迎回数は、一七九、五七一回、出征軍隊向け寄贈品は五五五種と活躍した。[33] 事例⑥で紹介した『早川貞水師講演　教育講談　愛国心　千人針』には、愛国婦人会と千人針の出会いが劇的に記されている。

また、昭和五年(一九三〇)十二月、大日本連合婦人会は、文部大臣訓令を契機に家庭教育振興・家庭生活改善を目的に、地位・職業・信仰などに関係なく既婚女性のすべてを網羅した組織として発足する。昭和六年九月十八日、満州事変が開始されると、久しく停滞状態に陥っていた女性の軍事援護活動は急速に活気を取り戻した。[34]

満州事変において、歩兵第三十七連隊の井上清一中尉の妻千代子が、夫が満州に出征する前夜自刃した事件は、軍国美談と仕立てられ、安田せい、三谷英子らによる大阪国防婦人会の契機となったとされているが、もう一つのきっかけとして、街行く女性たちから千人針を断られるエピソードがあり、婦人会と千人針の関わりを示している。

○事例⑲

昭和六年九月、満州事変勃発、続いて上海事変だ、世の中は戦争談のるつぼと化した。去る日も来る日も出征だ。子のようにしている甥の井上中尉をもつ安田夫人はじっとしていられなかった。出征軍人の見送りに、また哀れな遺族の慰問に千人針の依頼に、雨の日も風の日も街頭に立った千人針を市場やデパートや郊外電鉄の入口で依頼して歩いた頃は人も知るあの酷寒骨を刺すさ中だった。頼んでも「今手袋をはめていますから……」とか「荷物をもっていますから……」などと断られることが幾度かあった。その度に冷淡なこれらの同性に興奮を燃やした婦人は最後にすっかり情けなくなって了った。[35]

昭和七年三月に発足した大阪国防婦人会の活動内容は、ほとんど完全に出征兵士への慰問品贈呈と歓送迎に絞られていた。この会を足がかりに昭和七年十二月に大日本国防婦人会が創設された。昭和十二年日中戦争開始直後、三女性団体はほとんど同時に、いっせいに軍事援護活動を精力的に展開し始める。そして昭和十七年にすべての婦人会が大日本婦人会に統合された。[36]

このように婦人会の結成と活動の流れを見ていくと、千人針の流行と一致することが分かる。そして日中戦争以降には、明らかに千人針と婦人会の活動は結びついてくるのである。その点について川村邦光は次のように記している。

郷党意識は、日中戦争が始まり、竜巻のように一挙に全国を席巻し、皇国ナショナリズムへと発展していった。大日本国防婦人会や愛国婦人会(昭和十七年〈一九四二〉に統合され、大日本婦人会となる)の出征兵士の歓送迎、千人針、慰問袋づくりなどといった、共同活動は、これまでほとんどなかった郷党意識そして国民意識＝皇国ナショナリズムを盛り上げたであろう。とくに大日本国防婦人会は、軍部の支援のもとに、在郷軍人会を動かし、町ぐるみ

村ぐるみで結成され、燎原の火のような勢いで広まっていったのである。[37]

しかし、それぞれの婦人会の活動内容を見ても、その項目の中に「千人針づくりへの協力」のような記述は見られない。このことは、千人針があくまでも個人レベルの活動を婦人会がサポートするという姿勢を見せるためと考えられないだろうか。今後、婦人会の活動を具体的に検証し、千人針との関わりについて調べる必要があろう。

最後に

本稿では、千人針について、その習俗の始まりがいつからなのかに視点を置き、戦争ごとにその資料を整理した。そのことで、戦争ごとの流行の様子を概観することができた。今後はさらに、「日清戦争での事例」「北清事変での事例」「日露戦争での事例」「婦人会の成立とその活動と千人針の関係」「千人結から千人針への意味の変換」「五黄の寅の俗信と千人針」「寒冷地への携行物としての千人針」「千人針の起源伝承」などの視点を加え、さらに資料を調査し、千人針の流行を戦争、およびその援護を担った婦人会等との関わりをふまえつつ、千人針習俗の成立過程を分析したい。

そして、そこではじめて、日中戦争以降の千人針について論じることができると考える。日中戦争開戦以降新聞記事でも盛んに取り上げられるようになり、流行歌、映画、紙芝居などあらゆるメディアに登場し、あっという間に全国に広がったのである。私たちが知っている事例のほとんどは日中戦争以降のものであり、その事例は兵士の数だけある。今後、実物の千人針のデータを全国的に集約し(博物館等への協力依頼)、また聞き取り調査や文献資料(各都道府県、市町村の郷土誌などの調査)を集約し、千人針データベースを作成することを最終目標としたい。その際には、「千人針大流行の要因」「千人針のメディア展開」「千人針の地域性」「過疎地での千人針」「外地での千人針」「戦地での千人針の意味」「寒冷地から南方戦線へ」「千人針大流行の終わり」などの視点を加えていく必要があろう。

〈注〉

(1) 『大辞林』第二版、平成七年、三省堂
(2) 『広辞苑』第四版、平成三年、岩波書店
(3) 『日本国語大辞典』(第二版)、平成十三年、小学館
(4) 日本風俗史学会編『日本風俗史事典』昭和五十四年、弘文堂
(5) 『大百科事典』、昭和八年、平凡社
(6) 中山太郎編『日本民俗学辞典』改訂版、昭和八年、梧桐書院
(7) 『国民百科大辞典』、昭和十年、冨山房
(8) 福田俊雄編『時局認識辞典』、昭和十四年、日本書院
(9) 福田アジオ(ほか)編『日本民俗大辞典』上、平成十一年、吉川弘文館
(10) 大間知篤三『神津の花正月』昭和十八年、六人社
(11) 礫川全次「千人針についての民俗学的考察は戦中から」『歴史民俗学』第十号、平成十年、歴史民俗学研究会編。高崎正秀『古典と民俗学』上、昭和五十三年、講談社学術文庫
(12) 大江志乃夫「〝徴兵よけ〟の神から千人針まで」『季刊科学と思想』第三十九号、昭和五十六年、新日本出版社
(13) 『柳田國男全集』一四巻、平成十年、筑摩書房
(14) 『日本民俗文化大系　第三巻　稲と鉄』昭和五十八年、小学館

(15) 岩田重則「千人針」『民具マンスリー』二十五巻七号、平成四年。『ムラの若者・くにの若者―民俗と国民統合』、平成八年、未来社
(16) 千葉徳爾『民俗学のこころ』昭和五十三年、弘文堂
(17) 『比較日本文化研究』第七号、平成十五年、比較日本文化研究会編、風響社
(18) 喜多村理子『徴兵・戦争と民衆』平成十一年、吉川弘文館
(19) くじ逃れについては、大江志乃夫『徴兵制』(昭和五十六年、岩波新書)や岩田重則『ムラの若者・くにの若者―民俗と国民統合』(前掲)など様々な研究がある。
(20) 大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争―帝国への歩み―』平成十五年、刀水歴史全書)
(21) 前掲(注10)
(22) 『古典と民俗学』上、昭和五十三年、講談社学術文庫
(23) 『風俗画報』三一六号、明治三十八年五月、東陽堂
(24) 松本恒吉『日露戦役　婦人の力』大正元年十月、洛陽堂
(25) 『現代日本文学全集　第四九篇』昭和四年一月、改造社
(26) 早川貞水『早川貞水師講演　教育講談　愛国心　千人針』大正四年五月、大江書房。この早川貞水については、次のようにある。
はやかわていすい　早川貞水　文久元(一八六一)十二～大正六(一九一七)五／十五。明治・大正期の講釈師。江戸・神田生まれ。本名與吉。十七歳で講釈界にはいり、旭堂南慶(きょくどうなんけい)門で慶治。以後四代一龍斎貞山、二代松林伯円、初代桃川如燕門を転々とし、明治二十四年(一八九一)に三代真龍斎貞水門となって三代双龍斎貞鏡。三十二年四代真龍斎貞水(明治末年亭号を本姓にあらため早川貞水とした)。教育講談師と称し、寄席よりも地方講演で知られた。「力士伝」が得意で通称お相撲貞水と呼ばれた。(倉田喜弘・藤波隆之編『日本芸能人名事典』平成七年、三省堂)
(27) 『日本婦人』第四十四号、大日本婦人会
(28) 前掲(注2)『広辞苑』第四版
(29) 『アサヒグラフ　昭和七年二月五日　臨時増刊　満州事変写真全輯』、昭和七年二月、朝日新聞社
(30) 『愛国・国防婦人運動資料集5　大日本国防婦人会十年史』平成八年、日本図書センター
(31) 『寺田寅彦全集　第七巻』、平成九年、岩波書店
(32) 前掲(注28)参照
(33) 鈴木裕子編・解説『日本女性運動資料集成　第一〇巻　戦争』平成七年、不二出版
(34) 前掲(注30)参照
(35) 前掲(注33)参照
(36) 前掲(注33)参照
(37) 川村邦光『〈民俗の知〉の系譜―近代日本の民俗文化』平成十二年、昭和堂

著者プロフィール
渡邉一弘(わたなべ・かずひろ)　昭和四十一年宮崎県生まれ
日本民俗学専攻。鹿児島大学大学院人文科学研究科修了。
宮崎県史編さん室、宮崎県総合博物館の嘱託職員や『日之影町史』専門調査員などを経て、平成十三年から昭和館学芸部勤務。平成二十年から総合大学院大学日本歴史研究専攻博士後期課程。